2022年2月6日 降誕節第7主日礼拝

メッセージ「一粒の種に秘められた生命」　　牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 4章26−32節

先日、出会った言葉に、次のような言葉がありました。「根は深いところで知っている。昔、ひと粒の種であったことを」という言葉です。これは藤代聡麿（ふじしろとしまろ）さん（1911～1993）という真宗大谷派のお坊さんの言葉だそうですが、普段は忘れてしまっている大切なこと、それこそ「根源的」という漢字で表記する通りのことを、改めて考えさせてくれる言葉です。

私たちは普段、草であれ、樹木であれ、地上に表われている部分がどれだけ大きくなっているか、立派に茂っているかということしか見ることができません。しかし、「本当に大切なのは、地面の中に埋もれている根っこの部分なんだ。根っこが病気になっていたり、腐っていたり、貧弱であったりすると、木は枯れてしまったり、山自体が崩れてしまったりする……」。そのようなことはよく耳にします。しかし、そのような根っこも、たとえどんなに地中深くに根を張った立派な根っこであっても、かつては小さな一粒の種に過ぎなかった。始まりは一粒の種に秘められた生命だった。生命の神によって、その種の中に遺伝子という設計図が備えられていて、それが蒔かれたそれぞれの場所に応じて、発芽し、根を伸ばしていくのだ、ということなのでしょう。自分の力で大きくなった、立派になったのではなく、根源に還れば、神様が備えてくださった設計図、計画、生命があったのだ、ということに改めて目を向けさせてくれる言葉です。

今回の聖書のお話も、その言葉と似たようなお話でした。日本とパレスチナでは、地理も、気候も異なりますし、時代も大きく異なりますが、大地に種を蒔き、作物を栽培し、それを収穫して暮らすという人々の営みは、昔からどこでも共通していたことだったでしょう。前半と後半で二つの異なるたとえ話からなっています。前半は、人の手によって種が育つのではなく、種そのものがひとりでに成長して、自ら実を結ぶのであり、人はそれを収穫させて頂いているに過ぎない。自然の恵みは、人間の功績ではなく、神様からの頂き物だ、というような素朴で分かりやすいお話となっています。このイエス様のたとえ話を聞いた人たちは、貧しく差別されていたガリラヤ地方の農民たち、自分たちの畑を持たない小作農の人たちだったので、

彼らにもよく分かる話だったのではないかと思います。

農民たちは、様々な工夫をして、朝から晩まで汗を流して重労働をしても、それがいつでも必ず報われるというわけではありませんでした。農業はその年々の天候によって、大きく左右される営みだからです。その一方で、地主や、仲買人、徴税人たちからは、収穫量に応じた年貢、納税を求められ、それこそ「もっとたくさんの収穫量を」と常々要求されていたのではないかと想像します。けれども、イエス様が言われた通り、人々も言いました。「人が地に種を蒔き、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるのであり、初めに茎、次に穂、それから穂には豊かな実ができる」のである。つまり、自分たちの業ではない。収穫を与えてくださるのは、神様である。そして自分たちは、収穫の時が来たら、鎌を入れさせて頂くだけなのだ、と言うことでしょう。

続く二つ目のお話は、「からし種のたとえ」でした。このお話は「マルコによる福音書」だけではなく、「マタイによる福音書」にも「ルカによる福音書」にも書かれていますし、『聖書』には含まれていませんが、「トマスによる福音書」にも書かれていて、2000 年前にガリラヤ地方を歩き回りながら、イエス様が実際に人々に語った言葉が、そのまま記録されているだろうと考えられています。「からし種」と聞くと、私たちがよく目にするのは、いわゆる「マスタード（西洋からし）」に入っている粒々かと思いますが、からし種にも色々な種類があり、種の大きさも様々だったようです。紀元 1 世紀の頃にパレスチナ・シリア地方で栽培されていたのは、からし種の中で最も小さい黒カラシだろうと考えられているようですが、ゴマよりももっと小さな一粒の種が、成長すると 3 メートル、大きいものでは 5 メートルぐらいまで伸びるものもあったようです（山口里子『イエスの譬え話2』79 頁）。

そしてその「からし種」は、イエス様が譬え話として用いる前から、ユダヤ人社会でもギリシア人社会でも「小さい」ことを表現する際に用いられていた言葉でした。日本語でも「芥子（けし）粒のように小さい」と表現するのと同じです。そして、それは食用、調味料としても、人々に身近なものでした。その一方では、非常に生命力が強く、荒れ地でもどこでも育つために、畑の中で区画を区切って管理して栽培するのは難しく、すぐに野生化して他の作物をダメにしてしまうこともあり、植える場所を規制する教えもあったそうです（『イエスの譬え話2』80頁）。そんな小さくて、や

っかい者と見なされていた「からし種」を、イエス様は「神の国」のたとえとして、使われました。

「神の国を何にたとえようか」「神の国は次のようなものである」……。イエス様は様々なもの、人々の生活に身近で、容易に連想できるもので、神の国について語りましたが、それは現代を生きている私たちが、「死んで天国に行けば」と考えているような曖昧で漠然としているようなものではありませんでした。イエス様がガリラヤの人々と共に生きていた紀元１世紀の前半の時代は、ローマ帝国による植民地支配下にあった時代でした。「マルコによる福音書」の冒頭１章１節は「神の子イエス・キリストの福音の初め」という言葉で始まりますが、当時「神の子」と言えば、ローマ皇帝を指す言葉でした。そして「神の国」という言葉は、「神の支配」「神の支配のおよぶ範囲・領域」を表わす言葉ですから、当然それもローマ帝国の支配のおよぶ範囲を表わす言葉でした。それらが社会一般の常識とされていた時代に、イエス様は自分を神だと語る人間に過ぎないローマ皇帝ではなく、私たちすべての命の創り主であるヤハウェ、生命の神にこそ目を向けて、その生命の神の恵み、福音を語りました。

本当の神の国は、強大な軍事力や腕力で、上から無理やり押さえつけ、隣の人のものを横取りして広がっていくようなものではない。むしろ、それは人間の計画や思惑を超え、自然に芽を出し、成長していく種のようなものだ。また姿形が大きく、数が多く、力が強いことで、世に支配を広げていくようなものではなく、ひと粒のからし種のように小さく、また時にはやっかい者として見なされているようなものであっても、弱く小さくされ、世の片隅に追いやられているような、そのようなものをこそ、生命の神は豊かに用いられる……。目に見える力や支配に翻弄されていた人々にとって、この世の常識、価値観とは全く異なったイエス様のそれらの言葉は、地上にあって目に見える草木や葉っぱ、茎ではなく、地面の下にあって目に見えない根っこそのものに、目を向けさせるような、考え方や価値観の転換を促し、人々に希望を与えるものだったのではないかと思います。

さてローマ帝国の支配下で、ガリラヤの農民たちにイエス様がこれらの譬え話を語ってから2000年を経た今、現代を生きる私たちは、この言葉から何を聞くでしょうか。今回の「招きの詞」では、「ペトロの手紙Ⅰ」の1章から「人は皆、草のようで／その栄えはみな草の花のようだ。／草は枯れ、花は散る。／しかし、主の言葉

は永遠に変わることがない」（24b−25a 節）という言葉を読みました。ここで「主の言葉」と言われているものを、ついつい教会では「御言葉」と仰々しく言ったりしがちですが、これは翻訳された聖書の言葉のことではありません。ユダヤ人の言語感覚、ヘブライ語の言語感覚では、「言葉」と「出来事」は同じ（ダーバール）ですから、「主の言葉」とは「イエス・キリストの出来事」そのものを指していると考えられます。

イエス・キリストが、クリスマスに私たち人間の間にやって来られたということ、共に生きられたということ、そして最も小さくされている人々に神の国、神の支配の福音を告げ知らせ、そのために権力者たちから反発を買い、最も不名誉で残酷な十字架で処刑されたということ。しかし、その最も低くされた所から、神はイエス様を引き起こされたということ。それら全てが「イエス・キリストの出来事」であり、「主の言葉」です。そしてその出来事の物語は、2000 年を経た今日でもなお決して色褪せることなく、私たちの中に息づき、私たちを生かしてくれています。そのこと自体が、まさに「おのずから芽を出し、成長し、実を結ぶ種」であり、また「地上のどんな種よりも小さいが、成長するとどんな野菜よりも大きくなるからし種」なのではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は留まるところを知らないようです。あっという間に、一日の新規感染者数は日本全体で 1 日 10 万人を突破しました。これまではマスクや消毒を徹底して、隣の人とも距離を取り、飲食にも気をつけて、感染しないように、させないようにして来たにも拘わらず、ついに感染してしまった。ということで、自宅待機となり出勤できなくなって、責任を感じ、落ち込んでいる人も沢山おられると聞いています。病院も保健所も完全にパンクしていて、検査も全然間に合っていませんし、症状があっても入院もできない状態が続いています。

そんな状況ではありますが、いやそんな状況だからこそ、私たちは今日も地上にあって目に見える部分だけではなく、地面の下にあって目に見えない根っこの部分、すべての命の根源にあたる一粒の種と、その中に秘められた生命、命の神様からの掛け替えのない頂き物、預かりものに目を注ぎたいと思います。一粒の種に秘められた生命。それは紛れもなく私たち一人一人の中にも与えられています。そんな神様からの恵みを受けて、私たちは今日もここから導かれて歩み出していきます。